

♡♡クリーチャーなあのナースさん達を激しくレイプ&逆レイプ♡♡

人外ナースと SILENT Fuck

霧が立ち込む街中で、
ドスケベボディな人外ナースに出会い...

逆レイプ

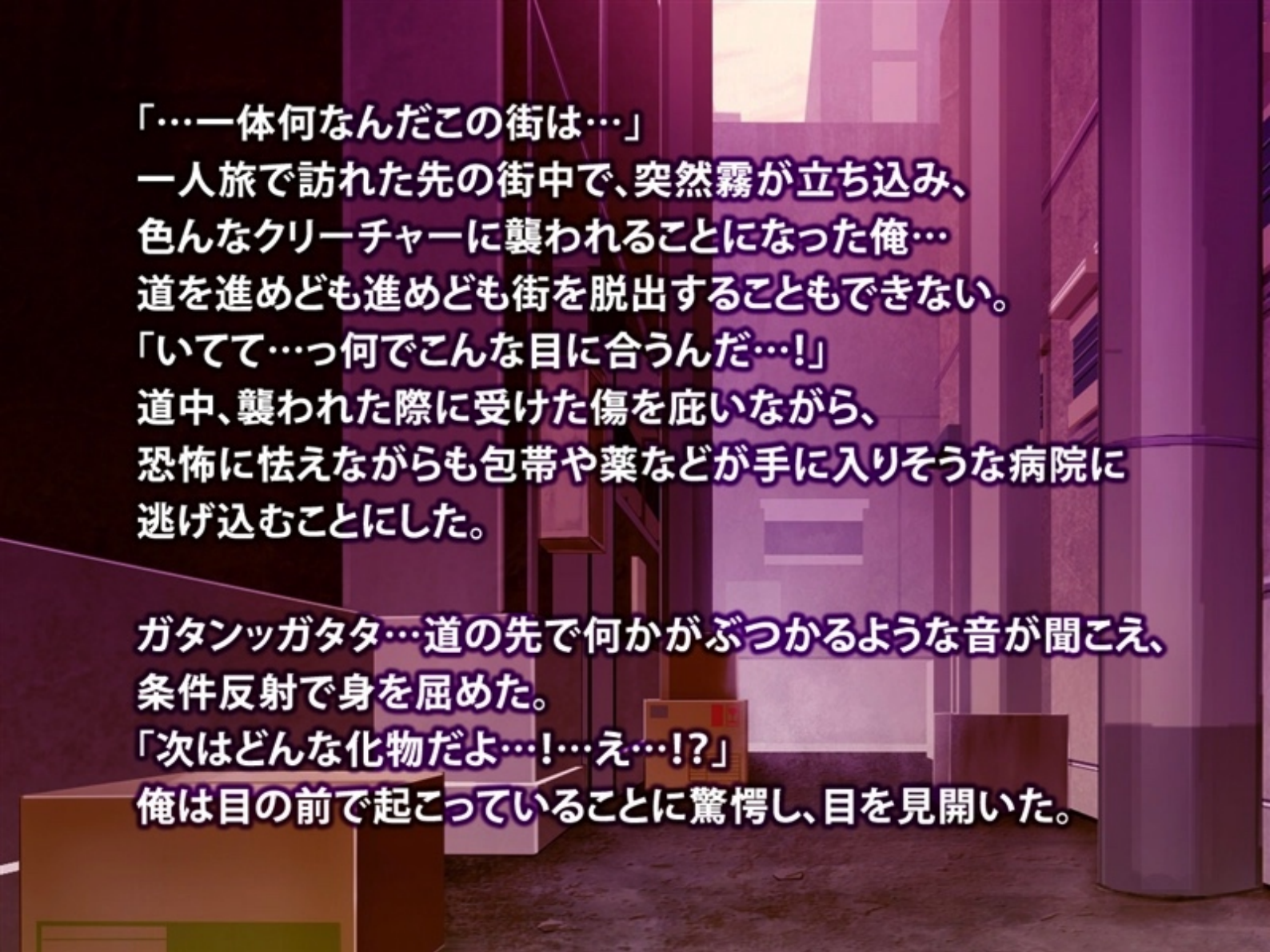
中出しファック

パイズリ

フェラ

覗き見





「…一体何なんだこの街は…」

一人旅で訪れた先の街中で、突然霧が立ち込み、色んなクリーチャーに襲われることになった俺…道を進めども進めども街を脱出することもできない。

「いてて…っ何でこんな目に合うんだ…！」

道中、襲われた際に受けた傷を庇いながら、恐怖に怯えながらも包帯や薬などが手に入りそうな病院に逃げ込むことにした。

ガタンッガタタ…道の先で何かがぶつかるような音が聞こえ、条件反射で身を屈めた。

「次はどんな化物だよ…!…え…!？」


俺は目の前で起こっていることに驚愕し、目を見開いた。



「……」
そこでは、目を疑いたくなる光景が繰り広げられていた。
僕の目と鼻の先で、三角頭のピラミッドのような兜を被った
クリチャーが、頭が腫れ上がったナースのような姿の
クリチャーを襲っていたのだった。
化物が化物を襲っているところなど、今まで遭遇したことがなかった。


「な、何だよこいつら……同士討ちか……？
クソツレを通らないと先に進めないのに……」
幸い、二体は僕の存在にまだ気が付いていない
ようだった。

はぁ……



焦りつつも俺が身を隠してるうちに、更に予想外のことが起こった。
三角頭が乱暴にナースの両脚を掴み、ガパツと左右に開いたのだった。
「……?」
下着などを纏っていない、ナースの艶かしい下半身が大きく拵げられ、アソコが丸出し状態になる。それを見て、俺は無意識に喉を鳴らした。

「くっ……いやいや、俺は何を考えてるんだ! あんな化物の性器なんかを見て興奮するんて……!」
そう言いながらも、行為を続ける二体から目を反らすことができない自分がいた。
ナースは突然の強制的な開脚にビクツと身体を跳ねさせ、ブルブルと震えているようだった。



俺が一人で動揺と興奮を抑えようとしている間に、三角頭は己の巨根をブルンツと音を立てながら取り出した。そしてその凶器をナースの大陰唇に擦り付け始めた。
スリスリ…ヌチユヌチユ…

「…こんな化物でもセックスをするものなのか…」

現状に混乱しながらも頭の中では冷静に考えてしまった。

ナースはフーフーツと呼吸を荒げ、なおも抵抗しようとするも、屈強な身体をもつ三角頭はぴくりともしなかった。

ナースの抵抗も空しく、三角頭の先走りのような汁でテラテラと濡れている陰部に三角頭は男根を埋めていった。

ぬるぬる..

ズブツズププ……!!

有無を言わせないような強引な肉棒の挿入に、ナースは声のない悲鳴を上げる。

「っわあっ……」
その光景を見て、恐怖からか、それとも感嘆からか、思わず俺は声を上げそうになるのを抑えた。



「……………」
三角頭はナースに覆い被さり、
激しく腰を打ちつけ始めた。
ぱちゅんッぱちゅんッ
ぱんぱん！


「す、すごい…激しいセックスだな…」

「ぱんぱんッ！」

「ぱんぱんッ！」

そう言えば他人の性交を間近で見るのは初めてのことだった。こいつらは「人」ではないが。液晶越しのAVや紙媒体のエロ本とは違う、ナマのセックス…三角頭の規格外の肉棒がナースの秘所を出入りしているのがこの距離からも見える。

「……………」
慣らしもしない挿入とピストン運動にナースは苦しげな動きをしていた。




グツチユグツチユグチユ……
いやらしい水気を帯びた音と肉が
ぶつかり合う音が建物の間と間の
中で反響する。そろそろ
ラストスパートのようだ。

「ふっつはあ……」

三角頭が腰を一際激しく
打ちつけた瞬間、ナースも
背をしらなせ、ビクンツ！と
身体を大きく跳ねさせた。
どうやら二対同時に絶頂を
むかえたようだった。

はっ
はっ
はっ



三角頭は絶頂の余韻でビクビクと
身体を痙攣させている
ナースのアソコから男根をぐちゅりと
音を立たせて抜いた。

「はあっ…」

んきゅん

ドキ
ドキ

「……………」
そのイチモツは未だにガチガチと
固さを保ったままだ。
三角頭は屹立した己の分身を
握ると、シユコシユコと上下に
抜き始めた。
目が何処にあるか分からないが、
ナースもその様子をじっと
見つめているようだった。



シユシユシユシユシ……！
無言のまま自身のトレード
マークのとき三角頭のように
ギンギンに聳え立つペニスを
手淫する。
そして上下することに
そのペニスはムキムキと膨張し、
その存在を更に主張していた。

そして次の瞬間。


ドセ

ドセ

はっ……

「……」
夥しい量の精液がナースの
身体全体に降り注がれた。
「……」
実際はどうか分からないが、
まるで歓喜するかのように、
ナースは身体をくねらせて
いた。





ナースのオマンコはいやらしくぱくぱくと痙攣し、ドロリと白濁を零していた。陵辱に満足したのか、三角頭のクリーチャーは巨大な鉈をずりずりと引き摺りながらこの場を去っていった。

ほっと安堵したのも束の間、油断した俺は、後退りした際、地面に落ちていた小枝をパキッと音を立てて踏んでしまった。

「しまった……！」

その瞬間、ナースが僕の存在に気付き、ずりずりと這って追ってくる。慌てて逃げ出そうとするも、その細い腕とは裏腹に強い力でガッチリと捕まえられてしまったのだった。

「は、離せ……！離してくれ……！」
力いっぱい必死にもがくも、振り払うことは出来ない。
（一、今度こそ殺される……！）

カキカキ

んんんんん

そう覚悟して目を瞑った瞬間、
すぐに下半身に違和感を感じた。
「え……？」

下を見ると、クリヤーチャー同士の性交を見て勃起した俺のちんぽを、
ナースはまるで患者に対する対応のように
器用に取り出し、手で握っていたのだった。

「はっ……っ……ええ……っ……っ？」



まさかの事態に思考と身体が付いていかない。
更に、ナースの小さな口からぬるりと出てきた舌がチロチロと
俺の肉棒に絡みつき始めた。

「……っ……っ……っ……っ？」

「なつ何をするんだ……やめてくれ……」
今まで覗き見していたことを咎めるかのように
ナースは先端をかぷりと啜え込んだ。
「……んぐ……じゅぽ……」



うあッ

はむ

かぷ

「ああ……そ、そんな……く、口の中、きもちい……」
こんな状況で、しかも相手は化物と分かっているにも、
悲しいかな俺の体は素直に反応してしまっ。そんな自分で自分が情けなくなる。

抵抗できないうちに、根元までずっぽりと
ナースの口の中に大事な陰茎が吸い込まれた。

「ふんふん……ふんふん……」

「ふんふん……ふんふん……」

「ふんふん……ふんふん……」

「ふんふん……ふんふん……」

「ふんふん……ふんふん……」

「ふんふん……ふんふん……」

その余りの感触に仰け反り、思わず悲鳴を上げた。
「あああっあああ……!!」
ナースの咽喉と舌がうねるように啞内の陰茎を刺激する。

「まっ待ってくれ……一体何が目的なんだ……！」
静止の声も届かず、咽喉の奥深くまでさらに深く根元まで啜えられ、
化物ならではの力加減で一段と強く吸われた。
「じゅるじゅる……ぐちゃぐちゃ……」

「あああ……！」

俺の困惑する様子を見て、ナースは
クスクスと嘲笑うかのように身体を揺らした



しまいに手まで加わり、ナースに奉仕を受ける形となった。

「くる……どろろ……」

「うわあああ……」

(駄目だ……こんな好き勝手されて、翻弄されっぱなしだと
だといつかやられる……!)



立ち込める霧の中で、恐怖と快感責めに合い、
絶望感に押し潰されそうになりながら
俺は。パニック状態がMAXになった。

「こ、こんな所で負けてたまるか!」

襲われる前に「っちから襲ってやる……!」

俺は、ナースの頭を鷲掴みし、己の男根を咥内に突き刺した。

「これでもくぐらえ……」

「……」

ざんげ……

アホ

アホ

突然の俺からの反撃にナースは驚いたのか、肩をびくりと震わせた。

「この淫乱な化物め……無駄にトスケベボディをチラつかやがって……」

「今まで襲われてきて、散々な目にあった分、つちが襲ってやるー!」
[~~~~~]

ぐっぽぐっぽぐっぽぐっぽ……っー

特有の粘着音だけが、下のほうから聞こえてくる。
今までイマラチオなんて女に強いた事はなかったが、
それは人間相手での話。化物になんて容赦はしない。

ヒィィィ

ヒィィィ

ガッッッ



「もっイク……イクぞお……化物とは違う、
人間様の濃厚ザーメンだぞー！」

イクイクイクイクイク

ビクッビクッ

イク

ドクンドクンドクンドク……！！
そして俺は勢いよくナースの膣内の中で射精した。

「はあはあ………」

トキ……

は……

精液がどろりとナースの顔や胸元を汚す。
そのエロチック的な光景を見て、俺の中で何かが吹っ切れ、
新しい欲望がむくりと頭をもたげた。



クリーチャーとの性交の味を覚えてしまった俺：
それから度々、ナース型のクリーチャーに出会っては、
こちらから襲い、犯した。
他のクリーチャーだと力の差がありすぎて逃げることしか
出来なかったが、ナースなど雌型のタイプだと不意打ちを狙い、
傍に落ちている鉄パイプやボールなどで襲えば勝てないことは
なかった。

くはぁぁぁ。

びん

びん

「はぁ…はぁ…」

息を荒げつつ、目の前のナースを押し倒した。
例えクリーチャーと言えども、穴があれば女だ。
俺はぐったりとしているナースを仰向けにし、
無毛な股間を突き上げたような格好にさせた。

「おい、俺の言ってることが分かってるんだろ？」

それじゃあそんな化物の姿でも俺が興奮できるように自分で身体を弄ってみなよ。」

ナースは首を横に振り、身動きした。

人間であれば怯えながらも抵抗をしているかのような仕草だった。しかし目の前にいるのはクリーチャーだ。

あお あお あお

「きつさとやれよーまた殴られてもいいのかーっ」

そう言ってガンツ……と激しい音を立てて鉄パイプでナースに当たるか当たらないかのギリギリの地面を打って脅すと、ナースはビクッと体を震わせ、観念したかのように自分の乳房に指を這わせた。

ふにふに、くにくくと乳房を愛撫しながら、
ナースから吐息が漏れ始めていた。

「本当に淫乱なクリーチャーだな。お次は自分の指でアソコも
ぐちゅぐちゅに解してみようか？」

乳房を愛撫し、身体を火照らせているナースは
腿を割るように生殖器のほうにその手を伸ばした。
くちゅ…くちゅり…と淫猥な音が僕の耳を刺激する。
クリトリスを指先で転がすように弄くり、
愛汁が糸を引いている様子を
喉を鳴らした。

ぐちゅぐちゅ

ぐちゅぐちゅ

キュン

準備万態なナースの脚を掴み、俺の腰をグイッと押し付けた。
「ちゃん言うことを聞いた」褒美だ！人間様のおちんぼだぞ！」
ぐちゅ……じゅぶぶぶぶ……

ズン
ズン

ズン

一気にその秘所を貫くと、衝撃でナースは口から涎を垂らした。
「ぶっ、何度犯しても飽きない化物マンコだな……上の口も下の口も濡れてドロドロじゃないか。」
そう言葉を投げかけると、ナースは羞恥からか顔を下に背けたように見えた。

「化物のくせにカマトトぶるなよー」この街に来てから散々びびらせられた
お返した……泡噴くまでこのちんぽで制裁してやるぞー！」



そうして、じゅぶじゅぶと音が鳴るような激しい抜き差しをし始めた。
まだ前戯が足りなかったのか、ナースの膣内はきつく、痛そうに
身体を身動ぎした。



「痛いのか？大丈夫、すぐ気持ちよくなるさ」
そう囁きながら、さつきよりも強く肉棒を突き入れた。
ヒュッと息を呑む声が聞こえた。
中をぐるりと円を書くように腰を使うと
ナースの良いところを掠めたのか、大きく背を反らした。

「突いて突いて、突きまくってやるぞー！こんな街じゃなきや
化物といってもナースを犯しまくることなんてできないしな！」

「……………」
有言実行と言わんばかりに、太腿を両脇に抱えて激しく
ピストンをする。現実逃避からかもしれないが、
俺は段々とこの異常な状況を楽しんでいた。
そう、俺は元々ナースさんとセックスすることが夢だった。

ズツッ

ずぶぶぶぶぶ

ナースも俺の動きに呼応するかのように腰を浮かせて振り始めた。
「うっ……何て締め付けた……」

思わず僕も声を漏らした。

ナースの中のヒダヒダが絡みつくように蠢き、最奥へ誘ってくる。
もう堪らない……！

「お前も気持ちいいんだろっ、気持ちいいなら気持ちいいって
言ってみろよー！」

と、言葉を発せないことを知っておきながら言葉責めをする。

ぬるぬる…

気持ちいい

気持ちいい



「そろそろイクぞ………たっぷり中出してやる………」
「ぐんぐんぐんぐん」
ドクンツドクンドクン………ビュルルル！
脚を左右に開き、受け入れ態勢も万端なナースに
俺は思いつき臍内射精したのだった。



「はは…今回も思いつ切り射精してやったぞ…!
どつた恐れ入ったか化物ナースめ…」
絶頂の瞬間、人間の女のように泣き叫ばないことが
初めは物足りなかったが、
快楽に身体を震わせ、吐息にだけを漏らす
姿が段々と奥ゆかしく、色っぽく思えてきた。
俺は男根を引き抜くと、ゴポゴポと蜜穴から
精液を零すナースを置いて先に進んだ。

足を進めた先で、再びナース型のクリーチャーに遭遇し、再び持っていた武器で戦闘不能な状態にした。

「そっだな、そう言えばナース達の胸はまだ堪能していなかったな。それじゃお前にはたっぷりパイズリで奉仕してもらおうか。」

んんんんんん

たろふん

んんんんんん

ふと思い立って、ビクビクと痙攣している
ナースのオツパイを味わおうと身体を持ち上げ、
ずぷりとナースの谷間にちんぽを挟み込ませた。





「う、うおおお……」
思った以上にムッチリとした柔肌に声を上げずにはいられなかった。
「何だよ……」いつのクリーチャーにあるまじき谷間は……まるで
吸い付かれてるみたいだ……
俺の分身は、はち切れんばかりの胸元にすっぽりと収まり、
勃起していた。


挟み込んだだけでは耐え切れず、下から性器を貫くようにパンパンと音を立てて上下させた。
ぱんぱんつくちゅぐちゅぐちゅ……!!

「う、うおおお……!!」

「ん……!!」

「ほら、お前も呆然としてるだけじゃなくて、俺のちんぽをオッパイで包んだり、擦ったりしてみろよ！
何のためにその腕があるんだ！」





強めの口調で怒鳴ると、おずおずとナースは僕の陰茎を
その乳房で包んだり擦ったりし始めた。
ふちゅん。ふちゅん。つふにふに……

「そうそう、その調子だ……」

ナースの胸の圧力が増し、俺はにやりとほくそ笑み、
下半身に与えられる快感に集中していった。



根元から先端までオッパイでぎゅうぎゅうと搾り取られる
ような感覚に酔いしれる。

「んんっもうイってしまいそうだ…っ！」

ナースも興奮しているのか、乳首がツンと上に尖り始めていた。

「何だ、お前も興奮してるのか？無理やりパイズリさせられて
発情するなんてとんだ変態ナースだな。」



「そんな変態ナースはおちんぽで制裁してやらないとな！」
なんて言いながら、谷間をグリグリと抉るように肉棒を押し付ける。
「ほら」これがお前の仲間のナース達を犯してきたおちんぽだぞ……！」
ナースの身体がビクビクと痙攣した。



「ぐわ〜……い〜……」

突然、責められる一方だったナースが口で俺のペニスの先っぽを優しく啜えた。

「れろれろ〜んちゅ〜……」

生暖かい感触に肉棒の先端が触れ、ビクンツと身体を引いて反応してしまった。

「ちゅぽ〜……それやばいって……」

急な刺激にすぐに射精しそうになって堪えるも、なおもその動きは追い討ちをかけてくる。



先端が谷間から顔を出したたびに、射精を催促する様にちゅぽちゅぽと舌先で刺激された。

「くっ…俺のおちんぼが、そんなに美味しいのか…?」

その問いかけに答える声は勿論ないが、まるで返事をするかのようにナースの胸や口によって俺の陰茎は限界までどんどん昂ぶらせられ、弄られた。

「っくおおお……」



「ぐああ……！……搾り……取られる……！」

「……」

「アア……！」

びゆるっびゆくー！びゅびゅびゅー……！

俺は今日何度目かの絶頂をむかえた。

ナースの胸元から頭部まで俺の放った白濁が降り掛かる。




「はあはあ……………」

俺は肩で息しながら、ぐったりと横たわるナースをおいて、
次なる獲物を求めて立ち上がった。
出し切った後も僕の陰茎は力を失わず、まだビクビクと
反り返っていた。

はっ
はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ
はっ



俺は一通りナース達の相手をしつつ倒し、
何とか病院の中で薬や包帯などを手に入れ、
傷を癒していた。その時、

ずりずりと何かが近づくような音が聞こえてきた。

「そこにいるのは誰だ……?」

部屋の隅から、下半身に逆さまの下半身が生えた
マネキンのようなクリーチャーが姿を現した。

マネキンは、こちらのナースと同じく、余り攻撃的ではない
部類のクリーチャーだった。

気持ち悪さと艶かしさが織り交ざったような肢体の間から、
パツパツと開いたマンコが誘うように
ひくひくと蠢いているのが見えた。

「何だっ…お前もやってほしくて近づいてきたのか…？」
まるで性交を象徴するような身体をした化物。
恥らうようにもじもじウネウネとした動きをしながら
俺の身体に絡みついていた。

おほ…

ビクッ、ビクッ


おほ…
おほ…

「んぐ…」

そして俺は喉を鳴らしながら秘所に吸い込まれるように、
指を突き入れていった。
ず。ふ。ず。ふ…


「うわ…熱……っ…」

マネキンのような質感の脚からは想像できないほど、中は
柔らかく、熱を帯びていた。



指を挿入すると、マネキンはビクンッビクンッ！と身悶えした。
ぐちゅぐちゅ！ぐちゅ！

さらに指責めを激しくすると、秘肉からはしたない愛汁が滴り始めた。
「見てみるよ、エロ汁がこんなにトロトロ溢れてきたぞ」
そう言つて、ツウーっと糸を引く汁を見せ付けた。



「こんなに歓迎されたんじや、挿入せずにはいれないよな。それじゃあそろそろ頂くとするか…」
ずずず…ずにゆう…!…!
まるでオナホに突っ込むかのように一気に貫いた。

「うおお…!…なんだよ、マネキンみたいな身体の癖に、いい肉童じゃないか…!…ナス達みたいにおっぱいも口もないが、オマンコだけで十分だな…!…うう…!…」
あまりの絶妙な締め付け具合に息を吐く。

「大体お前らはなんなんだよ……急に現れたかと思えば
こんな淫乱揃いで……何が目的なんだよ……」
その問いかけに返事をするかのように
ペニスをきゅっきゅと肉壁で締め付けられた。


「クソッ……」
ぱんぱんぱんっ
肉を打つ音だけが虚しく部屋の中で響いている。



「他の奴らみたいに、中にプチ撒けてやるぞ……」
「……」

マネキンの膣内にとつぷりと種付けをした。
プシュッ……！プシュンシュ……！
反対側の下半身まで同時に絶頂を向かえたのか、
潮を噴いたようだった。





「なんだ、反対側の下半身まで一緒にイッたのか……!?
ははは……っ面白い身体だな……!」
と、笑いながら絶頂を向かえてなお腰を
打ち付けるのを止めることはない。

「待ってる、そっち側にも挿入してやるからな……!」
舌なめずりしながら陰茎をズボズボ出し入れする。
その動きを補助するように、マネキンも腰を振り始めた。

「この…肉便器め…！そんな人間様の精液が欲しいのなら、たらくてやれよ…！」
と、笑いながら絶頂を向かえてなお腰を打ち付けるのを止めることはない。

吐き捨てるように言い、マネキンの身体を掴むと上下に存在するマネキンのマンコが歓喜するかのごとく、ヒクヒクと震えているのが見えた。





「ぐ……また出る……！」

どくどくどくどくびゅるびゅる……！
全部を出し切るように、白濁を叩き付けた。
「はぁ……はぁ……もうお前は用済みだ」

散々弄んだマネキンの身体を
投げ捨てると、棚に
備え付けられていたタオルで
自分の身体を拭き、一息ついた。

この病院に入ってからどれだけのナースや
マネキンなど雌型のクリーチャーと
出会い、性交をしてきただろうか。

ぐんぐん

ほほほほ……♡

「流石に少し疲れたな……」こら辺だと敵の気配も少ないし、
少し休憩するか……」





少しだけでも身体を休め
ようと、俺は
病室の一角に座り込んだ。
その時……
ガバッ……ゴトン……
「ぐ……ぐ……」

突然の衝撃に、冷たい床に
倒れ伏せることになった。
俺が油断をしてしまった隙に、
ナース達に押し倒され、
そのまま羽交い絞めに
されてしまったのだった。



「は、離せ……離せよ……!」

力いっぱい振り払おうとするも、
ずしりと上から押し掛かれた上に、
一対一ならともかく、
多勢に無勢なこの状況では
困難だった。

「うわあああ……!」

ぎゅっぎゅ……ぐちゅぐちゅ……
ナースが自ら俺の肉棒を握ると、
シユシユと上下に
抜き始めたのだった。

「やめろ……もう良いだろう……!
ほ、俺は絶倫じゃないんだよ……!」

「おや、おや、おや」

「おや、おや、おや」

「おや、おや、おや」

「うぐぐぐ……」
この病院に入ってから
散々射精しまくったにも
関わらず、更に強制的に
勃起させられ、
苦悶の声を上げること
しかできない。

「も、もう離してくれ……」
ナースの手袋越しに、
俺の肉棒がびくびくと震え、
龟头から我慢汁が
零れ出していた。
「あ、ああ……」





「うへうへうへ……」

別のナースは、俺の背後から手を回し、グリグリきゅっきゅっと優しい手付きで胸の飾りを弄び始めた。

「ち、乳首なんて触るなよ……」
ぞわぞわする妙な感覚が背筋を走る。追い討ちを掛けようとしているのか、他のナース達も俺の全身の敏感な部分を愛撫し始めた。
「く、くすぐりたい……やめろ……」

あやあや

あやあや

あやあや

あやあや

暴れる俺を押さえ付け、
ナースはスカートをとくし上げると、
掴んだ肉棒をあてがい、
そのままズブリと腰を下ろしてきたのだった。

ぬるぬる...

「あああああ.....」
俺の中で快樂のスイッチが
一気に入る。
「もうイヤだ...もうイヤなのに
気持ちいい...!」



目の前でたふんたふんと
揺れていたナースの
乳房の先端を無理やり
啞えさせられ、
母乳のようなものが
弾き出された。

「んぐんぐん……」
「んぐんぐん……」

ずんずん♡

ずんずん♡

んぐんぐん♡

んぐんぐん♡

甘いような、苦いような
何とも言えない味が口一杯に
広がり、飲み切れなかった
汁が唇を汚した。

「んぐんぐん……んぐんぐん……」

「ゲホッゴホッ……な、何だよ……？
今までお前達の仲間を
倒してきたことでも怒って
いるのか……？襲ってきたのはお前ら
化物の方からじゃないか！」

「……」
ナース達は何も答えることなく、
頷くこともなく、その代わりに
黙々と行為を進める。






「ひんひん……」
俺の悲鳴をBGMにしながら、
ナースの下半身の締め付けが
さらにきつくなる。
「頼む、許してくれえええ！
もうこれ以上出るもの
なんてないんだ……！
おちんぽ
搾らないでくれえええ……！」

ナースがじゅぽじゅぽと
汁気を帯びた音を
立てながら腰を激しく
振るのを、俺は声を
上げながら
朦朧とした目で
見つめることしか
できない。



「だ、駄目だ……イク……」
びゆるびゆる
どぶどぶううう……
「うほおお……出てる……」
嘘だろっ、まだ……
まだ出てる……!」

「」
今まであれだけ射精してきたにも
関わらず、俺のペニスからは
欲望が止まることなく溢れ出していた。

びゅるびゅる
どぶどぶ

交合

「もう駄目だ……誰か……
誰か俺を楽にしてくれ……」
「
伊っても伊っても終わりが
見えない快樂地獄。」

枯れ散らした悲鳴は
クリーチャーが蠢く
病院で反響し、
他の誰かに届くことも
なく霧の中の街へと
消えていった……。

END

人外ナースとSILENT FUCK